

当地広域の自然・文化・歴史 03 (pdf)

当地広域の超長期に亘り、市井の人々の日常生活の最中に、
純粹普遍的相互尊厳の意義を、紡ぎ継ぎ抜く不文律な伝統文化。
その不断の伸展の歴史的累積の精華としての、江戸期、加賀藩の平和
で豊潤な薫り高い日常の暮らしの中に溶け込んだ文化の精華の絢爛た
る開花実現。

絶対的な平和、中立、不介入、不可侵、総合的な文治政策の充実。
芸術、工芸、茶道（加賀の地で生れ発展した裏千家）、数学（和算➕
西洋の近代数学）、能、狂言、謡曲、鼓、笙、横笛、哲学、学問、全国的
レベルでの学術資料の収集と保護等々、

本源的人間性の復興開花の流れを、紡ぎ出し、継ぎ、浸透、深化への
絶えざる実現への熱情が、人知れず、人々の胸深くの琴線に充溢する
当地広域の文化の淵源、深源、真源。

人類(人間)の諸本性 時代	大宇宙 大自然 均衡調和 <u>自然本性</u>	超生死 相互尊厳 <u>人類本性</u>	共 感 寛 容 <u>社会本性</u>	<u>純粹普遍的</u> 情 操 <u>純粹直観的</u> 倫 理 モラル	<u>土徳の草の</u> <u>根の尊厳</u> を日常生活の隅々に宿す不文律の <u>伝統文化</u>	統治機構	非武断 武力に依る紛争解決は回避。	平 和 安寧安心、繁栄。 薫り高い 伝統文化の開花実現。	不可侵策 相互不可侵の尊重と確立。	日常生活内の慣習が不文律化し、更には、伝統文化として紡ぎ継ぎ抜かれ、浸透、深化拡大し開花する意義。
縄 文 絶対的な音調・心象・詩情が顕著	第一段 純 粹 絶 対同一、感嘆、畏敬、観、体得。	第一段 永劫的 蘇 生 回 生	第一段 互惠相生	第一段	第一段	第一段	第一段	第一段	第一段 高志（越）の大蛇（オロチ）に依る出雲征服説（梅原猛説あり）。オロチとは東北アジアの オロチョン族。	第一段 環アジアシベリア物流人物文化等交流圏（ヒスイ）の浸透拡大の初期基盤
山岳神信仰	第二段 霊峰白山信仰。同時期に前後し、氣多、高瀬、弥彦神社が創建の可能性あり。	第二段 縄文 + 稲作 + 白山 立山 信仰	第二段 縄文 + 稲作 + 白山 立山 信仰	第二段 縄文 + 稲作 + 白山 立山 信仰	第二段 縄文 + 稲作 + 白山 立山 信仰	第二段 縄文 + 稲作 + 白山 立山 信仰	第二段 縄文 + 稲作 + 白山 立山 信仰	第二段 縄文 + 稲作 + 白山 立山 信仰	第二段 縄文 + 稲作 + 白山 立山 信仰	第二段 霊峰白山系水脈（日本海側に越前九頭竜、加賀手取川、越中庄川。太平洋側に長良川）が、日本列島の真中に屈指の平和で豊饒な稲作水耕地帯をの恵をもたらし、不文律の伝統文化開花を醸成。
仏教伝来 大陸との物流人物文化交流が盛ん。 <u>記紀以前の紀元初期に遡及の可能性あり。</u>	第三段 縄文 + 稲作 + 白山 立山 信仰 + 仏教	第三段 縄文 + 稲作 + 白山 立山 信仰 + 仏教	第三段 縄文 + 稲作 + 白山 立山 信仰 + 仏教	第三段 天竺（インド）僧法道と弟子達が古刹（千光寺、安居寺、上日寺、大栄寺、観音寺等）修行場（石動山、米山等）創建との伝説あり。	第三段 縄文 + 稲作 + 白山 立山 信仰 + 仏教	第三段 縄文 + 稲作 + 白山 立山 信仰 + 仏教	第三段 縄文 + 稲作 + 白山 立山 信仰 + 仏教	第三段 アジア（含む・ペルシャ・インド）大陸からの思想は、平和で薫り高い文化形が成った	第三段 縄文 + 稲作 + 白山 立山 信仰 + 仏教	第三段 敦煌約 600 余の洞窟（3 百年代）、雲崗（4 百年代）、龍門（4 百年代後半）等の多数の石窟の出現以前に、遡及する長期年数に亘り、インドからの多様な人物文化交流があったことは極自然。尚、大半の石窟作成者は、刻名の風習がなく、不詳。
神仏習合 <u>記紀以前の紀元初期に遡及の可能性あり。</u>	第四段 越 前 平 泉 寺、美濃 長 滝	第四段 縄文+	第四段 縄文+	第四段 神仏習合の地石動山は、後の高野山	第四段 縄文+	第四段 縄文+	第四段 縄文+	第四段 縄文+	第四段 縄文+	第四段 縄文+

	寺白社化。も宗市も規模大	と神習体れの都りく 等山の何後教よ古模大	稲作+ 白山 立山+ 仏教+ 神仏 習合	稲作+ 白山 立山+ 仏教+ 神仏 習合	よりも古く、 寺院 360、僧侶 300 人超 に至り、天皇 祈願所化。	稲作+ 白山 立山+ 仏教+ 神仏 習合	稲作+ 白山 立山+ 仏教+ 神仏 習合	稲作+ 白山 立山+ 仏教+ 神仏 習合	稲作+ 白山 立山+ 仏教+ 神仏 習合	稲作+ 白山 立山+ 仏教+ 神仏 習合
奈良	ほゞ 同上	ほゞ 同上	ほゞ 同上	第五段 天皇・有力諸 寺院の荘園、 日本一集中の 地故に、情操、 倫理モラル 高まる。	ほゞ 同左	ほゞ 同左	第五段 天皇・有力諸 寺院の荘園、集 約 6 年、詠歌熱 い、最後、萬葉 集纂す	第五段 大友家持 国司赴任、最も 後、編纂す	第四段 天皇・有力諸 寺院の荘園、日本一集中の 地故に、侵略を 憚る風土が強 まる	第五段 主権国家的 潮流に対し、は たして平和な百 姓庶民を第一 とする文化の不 文律化が顕著。
平安	霊峰の給修者全広敷 山獄が道てに伝搬	ほゞ 同上	ほゞ 同上	ほゞ 同上	ほゞ 同上	ほゞ 同上	ほゞ 同上	ほゞ 同上	ほゞ 同上	第六段 貴族難行宗教 に対し、当該 区域では、只 管打座、従来 軽視された重 要性を高め、 典座を創設し 重視さへし、 農村部庶民を 中心に据えた。
鎌倉末 越加賀 七禅寺 永平寺、宝慶寺、大乘寺、永光寺、総持寺、国泰寺、(瑞龍寺)	第五段 只管打座、一元多元、多層複合的即非論の実質定着	第五段 感性一元の域に達した道元の教えは、既に、超生死二元論にして、無空との純粹絶対同一の眞源の場に感加賀の禪を確立。	第五段 人類（人間）の諸本性への純粹絶対同一にて、社会的他イデオロギー抗争回避	第六段 忘我、無我、無空等の直観、体感、体験、経験が浸透深化、拡大	第五段 鄙庶民の日常にて只管打座の実践を通して傳統文化が不立文字化・不文律化の浸透深化、拡大	第五段	第六段 武断厳禁は言うに及ばず。	第六段 都を離れ、臣國政大を加賀諸遵守生活で百姓と必豊饒を祈願	第五段 不可侵性の確立堅持は、言うに及ばず。	第七段 従前の鎮護国家的奈良仏教、難行貴族向け平治安仏教に対して、道元は、敢えて非都の当該区域にて、市民の人々の日常生活に平和高い傳統文化の開花を一意祈願。 その後、当該広域での念仏宗の一向衆自由に依る自律共和、自治共栄の真の場を創り出した。
南北朝 法然の念仏宗浸透	第六段 山川草木、尊卑生る純觀透拡	第六段 死生の立命横溢に付、兩者に互蘇し粹直觀が浸化、拡大。	第六段 醍醐帝の新皇親王（中世最高梨花集 3 南滞の文化人と新業和歌の著者）が約當年当該区域を擧在。	第六段 中世最高の文化人宗良親王（母は、法然を保護し、又、歌道を重んじる二条家出身）の当該区域での長期滞在故に、念仏宗が浸透、芸術的文治政策が浸透、拡大する基盤が形成された。	第六段 ほゞ 同上	第六段 ほゞ 同上	第六段 宗良親王（父後醍醐帝の政治的回復に付、当該地に於いての實現の地元の家臣共々、何より悲願し優先。	第七段 宗良親王（二度天台宗主座）の長期潜在故に、平和豐饒な薫り高い伝統文化の開花を紡ぎ継ぐ風土が浸透深化、拡大	第六段 ほゞ 同上	第八段 歴史上、親房記の恩師として、正統であり、平和で薫り高い傳統文化の開花現に付、当代最も優れた人物であり、当該区域の風土には、影響力は甚大であった。
中世戦国 親鸞信徒の一場。金沢御坊→石山御坊（石山本願寺）へと劇的な社会現象の発展。信長の力が削られ、敗退に	第七段 宇宙自然の絶一の普相嚴すが草の専當區域大大他性純対か純粹專宿士徳の相互を廣該に	第七段 超生死の極樂信仰が浸透深化、拡大。	第七段 講の相互扶助が浸透深化	第七段 この時点にて、百姓達の身を挺する自律自由、自治共和、共創共栄の社会構築にて、絶対的な非武断、平和、不可侵を死守せんとする情操・倫理・モラル觀が浸透深化、拡大。	第七段 ①鄙庶民（全ての市井の人々の日常生活にならぬ文化。）結果、前進は極楽、後退は地獄と人々は確信するに至った。	第七段 ①講の自由な集会運動（各分野別に随時開催決議）、②行政權を代替する絶対直接民主主義の浸透深化、拡大。	第七段 ①權威、職位、名譽、財力故にある人物なき搾取を徹底的に排斥。 ②絶対非武断非暴力を確立	第八段 ほゞ 同上	第七段 当該広域への侵略者は、農機具を徹底的に排除。みづからの自由を死守。 故郷広域への絶対不可侵性を終始確保	第九段 信玄、山岳仰、仏教、神習合、全国一大集中、北陸七瀬寺、南朝再興拠点、念仏宗の浸透深化、拡大等を連綿と引き続けた日常生活に統文化に依る絶対平和をする基本的風土（士徳）が根付いた。

繋がる。	<u>深化した。</u>									
江戸 ①一向衆（主権者）の恐るべき影響力を決して忘れず、 ②文治政策と極限美と学術の徹底的追及と実現こそが藩、引いては日本人の日常生活と国全体に安全、平和、豊饒で薫り高い伝統文化を開花し得る、と確信。 ③綱紀公は、保科正之、木下順庵（綱紀公の部下、木門十哲を育成）、新井白石、室鳩巢、雨森芳洲等優れた思想家との豊かな人脈網の向上に、超長期に亘る特段の支援を惜しまなかった。			第八段 ①綱紀公、木下順庵を育成。木下が家宜に白石を推薦。 ②木下（人間復興を説く）弟子新井白石、室鳩巢、雨森芳洲他木門十哲。 ③木下、御三家紀伊藩の多くの儒学者に教え、影響大。 ④室鳩巢、吉宗の享保改革推進を補佐。 ⑤林羅山の子鷲峰。綱紀、鷲峰の全集240巻著に支援大、子鳳岡と共に文治政治を推進。鷲峰の子鳳岡、文治政治推進役、家綱〜吉宗に影響大。 ⑥綱紀公は、斜陽の寺社の散逸危機下の保護保全で、京都五山・東寺、伏見宮・二条三条・高辻各家蔵書を整書櫃・文庫も建て所蔵文化財を保全此等は綱紀公の余沢	第八段 <u>絶対倫理モラル</u> ①刃傷沙汰の厳禁重罰が、日常生活に幅広く浸透。平和第一優先策を病的なまでに過敏な程に徹底することが、藩の維持向上策となる。 ②利家公の正室福寿院（三代利常の母）の異例な程に多数の寺院建立（妙成寺、天徳院、金沢と高野山に各一）、瑞龍寺（国宝）、身延山の久遠寺五重塔他、女性が一時に多数の本格的で質の高い仏教施策創設例他にない。	第八段 江戸初期から学風主義も究視が、主より探究を促進。学イデー、無源場すに意を高く揚。末則の間戦た輩 ①数風土主も究視が、主より探究を促進。学イデー、無源場すに意を高く揚。末則の間戦た輩 ②数は、ロギー、無源場すに意を高く揚。末則の間戦た輩 ③江戸正で難挑れを皆無を意を高く揚。末則の間戦た輩 ④江戸正で難挑れを皆無を意を高く揚。末則の間戦た輩	第八段 <u>絶対自治共和</u> ①加賀領広域では、各自開藩の講とを、随時集会所で、課題解決を直接合意する体制に内在。 ②最後の藩中（イ）非暴力的一向衆の侮れぬ潜在力への歴史的教訓を、家訓とし、決して忘れるな。 ③（ロ）兵力に依るは易く、藩校での西洋兵学の導入予算増を慎め。 ④（ハ）権力を弄せず、野心持たず。	第八段 <u>絶対非武断</u> ①長州征伐時、加賀藩は他藩に比べて征伐から帰国。武力を主開張する者、藩内に入らざる、との藩令を出した。③横井小楠は議相、手を加賀藩を出た。	第九段 <u>絶対平和</u> ①家康の謀反嫌疑と改易の頻繁な危機体験から、加賀前田家の第一家訓は、例外なき絶対平和の堅持となる。 ②尊経閣に収集した全国からの著名な古書、至高点な宝物は総数20数万点で、国宝22、重文77、類なき収集。 ③「加賀は天下の書庫」（新井白石） ④「（前田）綱紀は我後見だ。御三家当主達も若年であり、（綱紀公の）言行を見習うがよい」（八代将軍吉宗）	第八段 <u>絶対中立</u> <u>絶対非侵略</u> ①江戸末の京都にて渦巻く過激な議論の主は身を引く。藩から非難轟々となる ②幕府や他藩との堅持を国是とし、頑なに、節を曲げず。	第十段 ①大自然大宇宙、超生死の相互尊厳、共感寛容、此等諸本性を宿す風土が慈しむ草の根の純粹普遍的相互尊厳に依る、高い不文律伝統文化を紡ぎ継ぎ抜く、鄙庶民の日常生活の隅々に潜む大きな意義。 ②1657年、利常公死後、保科正之を後見人とした綱紀公は、伝統文化を重視する文治政治に依る藩政改革を実施。荻生徂徠は、「加賀侯非人小屋（御小屋）を設けしを以て、加賀に乞食なし。真に仁政と云ふべし」と述べた。 ④「政治、一加賀一、二佐賀」（江戸時代の一諺）